

Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.168
2017.9.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

— E.S. モースと坪井正五郎のはざまで —

鈴木 正博

● 第17回 ● 中間二立ち其連鎖トナルベキ遺跡

坪井正五郎が西ヶ原貝塚報告の連載を7回続けている最中に、八木柴三郎・下村三四吉の椎塚貝塚と阿玉台貝塚が報告されるといふ相互的な経緯があり、西ヶ原貝塚の土器群分析にけじめをつけた7回を以て(未完)とした後の研究は、遺跡毎の精確な分析から距離を置き、人類学としての成果を広く一般向きに「コロボックル風俗考」として纏め、やがて人類学の進展を目的とする基礎研究「日本石器時代総論要領」へと収斂する。(未完)以後の研究の大きな転換に注目するならば、研究の歩みとして椎塚貝塚の実態と阿玉台貝塚の成果に転換の契機を求めることになる。

加曾利B式に本質的な研究は椎塚貝塚であるが、坪井正五郎の転換点の背景を知るには「土器区分」の機運が熟した阿玉台貝塚の成果を知り、更には陸平貝塚の加曾利B1式も標本として鍵となる。

椎塚貝塚の土器は近い陸平貝塚よりも地理的に遙かに隔てた大森貝塚に類似する様相を認めつつも、第10回の「土器ノ形状」から第16回まで突起や意匠、粗製土器の在り方など触れてきたように、定量的にも定性的にも相異が認められる「相異の形態位相論」に従うことになる。その結果、大森貝塚と椎塚貝塚の「中間二立ち其連鎖トナルベキ遺跡」が課題となり、地方差の在り方が明確に問われ始め、それは同時に「類似の形態連鎖論」の方法的課題でもある。

そして椎塚貝塚の研究から10ヶ月を経た阿玉台貝塚の報告は、その間に進展した遺跡研究も反映する等極めて重要な成果を導出する。「土器製作ノ両式」では人類学教室蔵の資料を基に「元来関東地方所出土器ニハ二様ノ別アリ。」として阿玉台貝塚は「陸

平風或ハ陸平式」、椎塚貝塚は「大森風或ハ大森式」と概念化した上で、両者が混在することもあれば、「**其中間二位スルモノモ間々混淆シアレドモ**」、両者の弁別は有効であることを説き、併せて「**陸平式土器ノ出所**」として東京を中心に静岡から福島まで17遺跡を提示する。

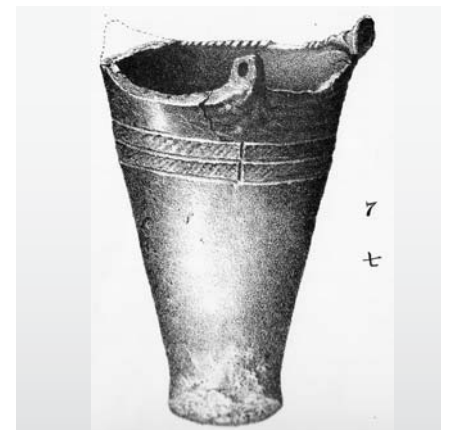
「**部落及年代ノ相異**」は「大森式」との関係を那珂川下流域(大櫛貝塚は?)と西ヶ原貝塚近傍の遺跡間に観るハマグリとヤマトシジミの採集環境差に注目、年代変化と理解し「大森式」を古く、「陸平式」を新しいとする「土器区分」に至り、特に両者の混在は前者の永住から「後進者ニ接セシ」現象と説く。

特に「陸平式」の遺跡分布と石器・石材から「**石器時代人民ノ移轉**」に至るくは坪井正五郎の影響であろう。それ故に西ヶ原貝塚を継続して精確に報告する「**特別ノ学識ト多数ノ時日ヲ要ス**」の姿勢に対しては文末にて敬意を表し、自らの報告が不完全との弁明にするが、加曾利B式研究ではもう一つの本質的な弁解である「**大森式ノ遺物ヲ胎セシモノニ就テハ猶詳細ニ論ズルコト能ハザレバ**、後日研究ノ上記スル事アルベシ。」に注目したい。坪井正五郎への忖度から、両名にとり椎塚貝塚はその後何ら研究の進展が見られないと念を押すのである。

となると坪井正五郎は「類似の形態連鎖論」の立場で椎塚貝塚に何を見たのであろうか。後に触れる議論を踏まえるならば、椎塚貝塚では「大森貝塚所出ノモノニ類セリ」突起、とりわけ第11図4の深鉢に附される加曾利B1式の代表的な突起に注目したのである。報告は「コレト同様ナルモノハ嘗テ陸平ヨリモ出テ、該貝塚篇第一版ニ搭載セリ、其第七

図即是ナリ」として第21図を指摘するが、この程度の類似観ではおさまらない坪井正五郎は、椎塚貝塚報告直後となる「西ヶ原貝塚探求報告。其二。」において突起形状の詳細を穿つことになる。具体的には第21図の突起を「**横霊芝形**」と概括範疇化した上で西ヶ原貝塚では三種に形状分類し、突起の平坦面が左右のいづれを向いているかの別、更には平坦面の形状を観察し、後者については「平坦面の中央に境界判然たる凹みを有するもの」を「**蛇の目**」、平仮名の「つ」の如き巻き方をしたる形状を「**つ巻**」と弁別、白眉は土器の文様、特に「**横霊芝形**」突起が「**外面帯形模様**」と相関することを明らかにする。

その結果、「横霊芝形」突起から、大森(「つ巻」と「蛇の目」)—千鳥久保(「蛇の目」)—西ヶ原(凹が判然としぬい「中凹」と「つ巻」)—古作(「蛇の目」)—椎塚(「つ巻」)—陸平(「蛇の目」)、という形態学的遺蹟連鎖を導出し、「**相異の土器区分論**」とは異なる連繫視点を確立するとともに、「**横霊芝形把手の起源に付いては考えがござります**」との余韻を残して(未完)のまま中断する。



▲第21図 陸平貝塚の加曾利B1式

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

目次

■加曾利B式土器 中間二立ち其連鎖トナルベキ遺跡(第17回) 鈴木正博 …1
■考古学の履歴書 ことのはじまり(第10回) 間壁忠彦・間壁霞子 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第161回) 田邊朋宏 …3
■考古学者の書棚 「古墳の話」 長濱誠司 …4

考古学の履歴書

ことのはじまりー「..それでは 何だ」(第10回) ————— 間壁 忠彦・間壁 葎子

4. 石棺の石材(1)

古墳に納めた柩には、石材を丁寧に加工した石棺が用いられていることがある。古墳時代の前・中期の割竹形石棺・舟形石棺と中期の長持形石棺、後期の家形石棺が知られ、かなり優れた古墳に見られる。使用された石材は、火山の噴出物が固まった凝灰岩で作られることが多く、時に砂岩によることもある。日本は火山国であるから、凝灰岩は各地にあるため、近隣のものを用いられているのだらうとして、石棺の石材の産出地のことを検討されることは多くなかった。

1970年ごろの開発ブームは、日本中で遺跡破壊を巻き起こした。私たちの活動拠点であった岡山県も例外ではなく、倉敷市内でも庄地区の王墓山という低丘陵が宅地造成された。その対応にあたったとき、既に古く明治時代の末年に横穴式石室から取り出して、そのすぐ前面に置かれていた組合式家形石棺も検討の対象となった。この古墳は、四仏四獣鏡をはじめ多数の鉄器、須恵器類が出土したことで知られ、その遺物は東京国立博物館所蔵となっている。

この石棺の石材は沢山の貝殻を含む堆積岩で、石棺としては特異な材質であるため早くから注目されてきた。岡山県の西部、井原市の山中に産出する貝殻石灰岩で、産出地の地名から浪形石と呼ばれる石材が用いられ、同石材の家形石棺は県内の巨大横穴式石室として有名な備中総社市こうもり塚と備前岡山市牟佐大塚の室内に納まるほか、総社市秦石塔山古墳の室内でも知られていることが明らかになっていた。

それでは、岡山県内出土の石棺として知られているそのほかに二十基ばかりある石棺はどこかの石材によるのかとなると、凝灰岩と記述されているのみで、産出地などが調べられたことはなかったのである。これが「それでは何だ」の出発点だったが、長い石棺石材追跡の始まりだとまでは思っていなかった。県内には凝灰岩の良好な産出地は知られていないが、近隣の県まで含めれば、さほど遠くないところにあるという気軽な思いだったためである。

王墓山遺跡群調査報告の機会に県内の貝殻石灰岩以外の石棺がどこかの石材によるものなのかが判ればと思ったのである。そこでまず石製の考古学資料について、しばしば教えをうけていた岡山大学の逸見吉之助先生のもとを訪れた。

逸見先生は、戦中に東京大学で鉱物学を専攻され、中国東北地方で研究されていたが、終戦で帰国後の一時期新制高校の理科教師をされていた。私たちはそのときの生徒だったことから、無遠慮に考古学資料の石器や石製品の材質を御教示頂いていたのである。普通の遺物は研究室へ持ちこんでお願いしたが、石棺は持ち運びが出来ないため先生に石棺所在地まで御足労いただくことになった。

いくつかの石棺を見てまわる中で、石棺を作ったような良質な凝灰岩は東隣の兵庫県、南隣の香川にはあることなどを話されたが、個々の産出地についてはすぐには明言されな

かった。ただ赤磐市小山古墳の石棺の前で先生は「これほど明確な熔結構造の石材は九州阿蘇山の熔結凝灰岩が有名なのだが」と呟かれた。岡山県内の石棺石材の産出地探しをと思っていた私達はあまりにも遠い地名におどろき、僅か二十基あまりの石材産地探しが容易なことではないと感じたのであった。

小山古墳の石棺は、両方の長側に舟縁状の突帯を付けた舟形石棺で、形態的にも石材とおなじ九州の石棺である。小山古墳の石棺は破壊されて断片となり、石材を観察し易いが、これとよく似た石材にみえる総社市造山古墳前方部に置かれている刳抜石棺の身は、完形だが雨曝しになり石の表面が観察しにくい。しかし、蓋と合わせる側壁の上面が印籠蓋合わせに加工されており、九州の石棺の特徴を持っている。石棺の形態は、石材産地の地域にある石棺と一致し、石材を運んで石棺所在地で製作したのではなく、石材産地で作られた石棺が運ばれてきた可能性も明らかになる。

遠路を運ばれた阿蘇凝灰岩石棺を手始めに、岡山県の石棺石材が順次判明していく。その成果は「石棺石材の同定と岡山県の石棺をめぐる問題」(倉敷考古館研究集第9号)で発表した。それらは、黒灰色の阿蘇山凝灰岩2、ピンク凝灰岩1、砂岩1、浪形石4(現在5)、兵庫県高砂市亀山石12、現在実見不能の石棺2の22基で、それぞれの石材産出地の石材と個々の石棺石材の肉眼観察によったが、肉眼観察での見間違いを防ぐために、石材のX線回折を逸見先生の御指示と御指導でおこなった。

X線回折では、石材に含まれる鉱物の種類とその大略の多さが判るのみで、石材全体にわたる分類が出来るわけではないが、石棺に使用されたような限られた種類の石材を区分するためなら十分有効な方法であった。

こうした岡山県内の石棺石材の産地同定がかなり広範な地域の石材産出地におよんだことから、広い地域の石棺とその石材に調査がおよび、全国的な石棺の点検にまで足を運ぶことになる。

間壁忠彦 略歴	
1932年	岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部法学科卒業
1954~1973年	(財)倉敷考古館学芸員
1973~2006年	同上館長
1968~1998年	広島大学、1968~1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講
1982~2005年	就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講
2006~2015年	(財)倉敷考古館学術顧問
間壁葎子 略歴	
1932年	岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業
1955年	岡山大学法文学部副手(池田家文書整理)
1956~2015年	(財)倉敷考古館学芸員
1979~1986年	中国短期大学非常勤講師(歴史学)
1985~2004年	神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授
1995年	明治大学で論文博士(歴史学)

隔月連載です。次回は岡田淳子先生です。

Jレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 161

矢田野エジリ古墳・八日市地方遺跡 ～小松市

田邊 朋宏

小松市の下濱貴子氏から紹介ということで、「マイ・フェイバレット・サイト」とは少し毛色の違う話になりますが、私が行った小松市での3回の出張撮影についてまとめたいと思います。

初めて撮影に伺ったのが、平成24年6月3日でした。前年まで、永平寺町の嘱託として勤務していた横幕真氏が小松市に職員として就職をしたのを機に、いつか撮影したいと思っていた矢田野エジリ古墳出土埴輪を撮影させてくれないか、と頼んだのがきっかけでした。当時、遺物撮影の世界に足を踏み入れて数年がたち、いろいろな遺物を撮影してみたいと思っていた頃です。横幕氏から下濱氏に話をさせていただき、ちょうど小松市埋蔵文化財センターの夏季特別展で「矢田野エジリ古墳出土埴輪の世界」を計画されていたことも相まって、正式に撮影に伺うことになりました。しかし、私は出張撮影に伺うのは初めてで、いきなり重要文化財。大変緊張しましたが、これも経験だと思い、当時所有していた1BOX車に機材を積み込み、出かけていきました。まだ当時はデジタルカメラを所有していないために4×5ビューカメラで撮影を行いました。写場は小松市埋蔵文化財センターの研修室。朝一で到着し、撮影用のセットを組みます。はじめに行ったのが15本の円筒埴輪と2本の朝顔形埴輪の集合写真。重要文化財であるため、扱いは下濱氏と所長の榎田誠氏のお二方にお任せし、私が指示を出して並べていただきました。大物の大量集合写真のため、カメラの位置はほぼ天井近く。脚立に上っての撮影になります。カメラが天井に近いと、フィルムホルダーの挿入が非常にやりにくい。この撮影だけで午前中が終了。午後からはいよいよ人物埴輪の撮影。まずは全点の集合写真。円筒埴輪と同様、高い位置からの撮影。続いて、人物埴輪を一つずつ、正面と斜めを撮影。この撮影では、普通の高さになり、楽になりました。しかし、途中で、フィルムホルダーに入れてきたフィルムをすべて使い切ったため、急遽撮影済みのフィルムを出し、未撮影フィルムを挿入という作業をするというハプニングもありました。全部で27カット、53枚の撮影を終え機材を積み込んだのは午後9時でした。



▲小松市での撮影風景

2度目は平成26年7月1日に報告書『八日市地方遺跡Ⅱ 第3部 製玉編 第4部 木器編』(2014年刊行)の巻頭図版掲載写真の撮影に伺いました。この2年の間に他にも出張撮影するようになり、持っていく道具も厳選されたため、機材車も軽ワゴン車になりました。また、この撮影からデジタルカメラを導入しました。デジ

タルカメラの導入により、試し撮りが行えるので、ライティングの確認ができるようになりました。しかし、4×5フィルム撮影時にカメラ交換をする必要があり、また、画角の調整も必要なため、1カットにかかる時間が増えました。今回は重要文化財でないため遺物の配置は主に私が行いました(数点重要文化財が含まれており、その配置は下濱氏にお願いしました)。撮影したものは、「組み物」「結合補助材」「木針状」「襷」の4カットです。そのため、遺物の配置もスムーズにいき、午後3時半には撮影が終わりました。

3度目は、平成28年1月21、22日の両日にわたり報告書『八日市地方遺跡Ⅱ 第5部 土器・土製品編 第6部 自然科学分析編 第7部 補遺編』(2016年刊行)の巻頭図版掲載写真の撮影に伺いました。雪の日で、小松市埋蔵文化財センターに到着すると、職員総出で雪かきをしていました。雪かきを横目に機材を搬入。前回同様、4×5フィルムとデジタルの両方の撮影を行います。今回の被写体は、下濱氏の専門の土器編であるため、かなりのこだわりがある様子。そのため、当初から初の二日間の日程。撮影は、遺構ごとの一括遺物撮影のため、1カットにおさめる遺物の量がかかなり多く、次から次へと土器が出てきます。また、完形土器だけでなく編年上重要な破片も入れたいとのことであったので、その配置には苦労しました。1日目は午後8時30分まで、集合を9カット撮影しました。翌日も土器の集合写真を3カット、フィルムとデジタル両方で撮影を行い、そのうち、デジタルのみで遺物単体の撮影を行いました。中でも苦労したのが、首飾り状につながれた管玉と勾玉のペンダント。管玉一点ずつに黄色で出土位置のマーキングが施されていました。それを見えない位置におさめるのに一苦労。一点動かすと他も連動して動く始末。見えない位置に配置するのに小一時間かかりました。この日は午後5時半には終了しました。なお、後日追加としてミニチュア土器や土製円盤等の撮影を横幕氏が福井市文化財保護センターに持参していただき、集合・単体合わせて10カット、デジタルカメラで撮影を行いました。

このように撮影した写真は、展示会図録や報告書に掲載していただき活用してもらっています。特に矢田野エジリ古墳の埴輪の集合写真は、小松市埋蔵文化財センター来訪記念絵葉書やホームページでも活用していただいています。また、2013年に刊行された『季刊考古学・別冊19 若狭と越の古墳時代』では、表紙に採用していただいています。しかし、先日改めて矢田野エジリ古墳出土埴輪の写真を見る機会があり、見直してみるとピントの甘さやライティングの間違いなどが見つかり、いつかリベンジする機会があればと思っています。

このように出張撮影は、私のわがままから5年前に始まりました。未熟な私を呼んでいただいた、榎田誠所長、下濱貴子氏、横幕真氏に感謝いたします。その後、ほかの市からも呼んでいただけるようになり、撮影機会も増え、写真も活用いただけています。今後もよろしくお願ひします。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは野原大輔さんです。

考古学者の書棚

「古墳の話」(『忌中』収録)

車谷長吉／文春文庫(2006)

長濱 誠司

今回紹介するのは、考古学の本ではなく、短編小説です。車谷長吉、ごぞんじでしょうか?昭和20年生まれ、兵庫県姫路市(出生当時は飾磨市)出身の小説家です。平成の時代に入ってから評価され、第119回直木賞を受賞した『赤目四十八瀧心中未遂』は寺島しのぶさん出演で映画化もされました。姫路市周辺を舞台とした私小説作品が多く、本作もその一つ。ただし身を切り裂くようなアクの強い作風は周囲との軋轢を生むこともありました。最終的には私小説家の廃業宣言し、平成27年に死去されました。

本作は平成15年に発表された短編集に収録されています。作者に興味をもって手にした本の中で偶然に出会った作品ですが、もしこのタイトルだけに関心をもって読み始めると後悔する可能性が高いと思います。収録作品どれをとっても重い内容、エキセントリックな展開で気軽に読書を楽しむには不向きかと思います。

作品の内容を紹介すると、回想を挟んで「私」たちの平成14年の結婚記念日の1日を描いています。冒頭から知人への静かな憎悪、実際起こった殺人事件について記述が続くうざりします。また結びも「ぼかんと口を開け」てしまうような展開。この中で回想の部分が古墳にまつわる話です。

主人公である「私」は高校生。校内にある古墳の石室は、鬱屈した高校生活の逃避の場になり、「死んだ空気」の気持ちよさに浸っていました。「私」が古墳に出会ったのは中学生の時、姫路市街地の北側にある御輿塚古墳を見学し、横穴式石室の神秘性にふれたことからでした。高校2年生の時、友人から「オンパノホトコロ」という古墳の存在を聞き、再び古墳に対する関心が甦り、そこへ訪れる道中で同学年の伊佐佳奈子とすれ違います。「私」と佳奈子は古墳での偶然の出会いを重ね、二人の距離は近づきます。「私」は将来の選択に揺れ動く中、佳奈子の目指す古代史を学ぶ道も悪くないと思うようになります。しかし^{よびひらて}瓢塚古墳へ「デート」の約束を交わした後、佳奈子は殺人事件の被害者となり、二人の仲は断ち切られてしまいます。加害者への憎悪、佳奈子の意志を継いで古代史を学ぶか、複雑な思いの末に「私」は文士を目指す決意をします。決意の場は御輿塚古墳の石室でした。

詳細な作者論や文学評論を加えるだけの技量はありませんが、車谷長吉の高校時代は、まず県内有数の進学校への入試に失敗した挫折にはじまり、3年生で文士を志す決意をしたといわれています。この作品は、小説家である車谷長吉の胎動期を思春期の恋愛を通して描いたように思います。その舞台としていくつかの古墳が登場しますが、播州(姫路)を作品のフィールドとする車谷にとって「私の古里・播州には古墳が多い」と表現するくらい郷里を象徴するものだったのかもしれませんが。

「私」が中学、高校時代を送った昭和30年代半ばから後半という時代、兵庫県の考古学史から見ると興味を引く時期です。

「私」が古墳に関心をもつようになったのは、昭和35年、中学生の時です。社会科の三村先生が生徒を募って御輿塚古墳の見学に行ったのがきっかけでした。昭和30年代前半は、いたすけ古墳の保存運動に代表される開発と遺跡の保護がせめぎ合い、遺跡に対する関心が国民の中で高まった時期でした。兵庫県でも昭和32年に起こった小野市の「焼山群集墳開拓事件」は多くの研究者や学生のみならず、市民も参加する保護運動へと発展し、全国的にも大きく報道されています。またこの時期、研究者により兵庫県内の各時代の遺跡の状況調査が行われています。その報告は、地方紙である神戸新聞に「祖先のあしあと」と題して長期連載されますが、さらに姫路の沖合にある家島群島の総合学術調査のきっかけになりました。ちなみに昭和35年、姫路市では名古屋山遺跡の弥生時代中期の住居跡から銅鐸の鋳型片が初めて出土しています。三村先生もこのような時代の中で、古代史への関心がいっそう高まったのではないかと考えられます。御輿塚古墳は玄室内に家型石棺が残る、姫路市内の横穴式石室を代表する古墳です。中学校からは遠くない場所ですが、三村先生の古代史への関心が足を運ばせたのかもしれませんが。「私」たちはまだ時代の空気を直接は感じていないでしょうが、教師を通じてその影響は間違いなく受けていたと思います。古墳に近づくとドキドキ感や草をかき分け「あつぞつ」と叫ぶ、初めて古墳に出会った喜びは思い返せば共感できる感動です。この箇所描写は細かく車谷長吉の古墳との出会いが反映されているのかもしれませんが。

市民の中で遺跡に対する関心が高まったこの時代の空気を、同時代に生きた車谷長吉が小説という形で記録したことは、単なる偶然かもしれません。しかし幸運にも後の時代まで作品として残ることになりました。

ところで、「私」と佳奈子が最初に出会った「オンパノホトコロ」、今日では所在地の字名から木場山群集墳として周知されていますが、「私」がのぞき込んだと思われる古墳の傍らに解説版が設置されています。そこには現代の中学生がトライやるウィーク(就労体験)で作った子ども向けの説明文も併設されています。その文中にこんな一文があります。「…もしよかったら入ってみてね。お母さんに抱っこされているようなあつたかい感じがするかもしれないよ…」今日の私たちでは思いもしない発想です。おそらくこれを書いた中学生たちは「古墳の話」は知らないはず。それでも半世紀もの時代を隔てた中学生の古墳に対する神秘性への思いが共通しているのは驚きです。横穴式石室に潜り込み、中の空気を吸ってみたくまりました。

アルカ通信 No.168

発行日 2017年9月1日
 企画 角張淳一(故人)
 発行 考古学研究所(株)アルカ
 〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
 TEL 0267-25-0299
 aruka@aruka.co.jp URL : <http://www.aruka.co.jp>